特養 従来型で改築

短期入所6倍に増床

建物の老朽化で全面改築を進めてきた社会福祉法人愛の泉（潮田花枝理事長、埼玉県加須市）の特別養護老人ホーム「愛泉苑」が今春完成した。ユニット型よりも低料金の従来型を継続し、感染症対策を考慮して多床室から完全個室に切り替えた。需要が高まる短期入所は定員を約6倍に増やした。（市川傑）

特養ホーム 愛泉苑（埼玉・加須市）

平屋建ての多床室従来型の愛泉苑（定員80人）は1981年に開所。老朽化を受け、4年前から全面改築を視野に検討を進めてきた。年々利用者の要介護度が高くなり、多床室での生活は難しく、加えて多床室での感染症対策は利用者と職員双方の負担が大きかった。また、水害リスクが懸念される地域で、垂直避難できないことも気掛かりだった。

こうした課題の解消も見据え、既存施設の改修ではなく、完全個室の4階建て施設を敷地内に新築することを決断。新環境設計（東京）が担当し、地元建設会社が施行。昨年2月に着工し、今年4月に完成した。工事費（旧施設の解体費含む）はおよそ16億2500万円。自己資金、自治体の補助金、福祉医療機構、銀行からの借り入れで賄った。

国はユニット型を推奨するが、引き続き従来型を選択したことに「迷いはなかった」（潮田理事長）。背景には低料金で利用者の費用負担を抑えられる強みがある。要介護度や所得によって負担額は変わるが、ユニット型と月額3万～5万円ほどの差が出るという。ユニット化に伴う職員の追加採用もネックだった。

新施設は感染症、災害への備えを徹底。利用者が暮らす2～4階には廊下の途中に大きな引き戸を取り付け、居室壁間の一部を隔離できるようにした。今秋からは井戸水整備の工事を始め、断水しても使える生活用水を確保することにしている。

3、4階が特養で定員はこれまでと変わらない。短期入所は2階全体を使って36床増の43床を整備。現在、短期入所で働く常勤換算の介護職員（10人以上）を募っており、今後2年間で満床を目指す。

在宅介護の休息などにつながることから、市内では短期入所のニーズが高い。法人のケアマネが作成するケアプラン340件のうち、60人が短期入所を利用。このうち50人が他法人を利用している現状もあり、増床でニーズを取り込めると判断した。

旧施設は今冬までに解体する。潮田理事長は跡地を活用して「障がい者の就労や生活に貢献できる事業を検討したい」とし、法人初の障害福祉事業の着手に意欲を燃やしている。

個室となった新施設で介護に当たる職員（右）＝愛泉苑提供

愛の泉＝ドイツ出身の宣教師ゲルトルート・キュックリッヒや初代理事長となる岡安寿々らが1945年、埼玉県礼羽村（現在の加須市上手）に戦災孤児を収容する「愛泉寮」を創設したのが始まり。現在、市内で特養や養護老人ホーム、デイサービス、児童養護施設、乳児院、保育所など18事業を展開する。

障害者補助犬

「合理的配慮」を追求 議連が企画

議員の会の田村会長（左端）らが企画展を見て回った

完成してプレゼントされた遊具

高齢者のリハビリ

稲川利光 監修

みどり野リハビリテーション病院 課長代理 風間健二

「運動して良かった！」〈46〉

今回は患者の中で「運動して良かった！」と感じてくれた人がいたので紹介します。この患者は80歳代の女性です。大腿骨頚部骨折を受傷し、私が勤務している回復期の病院に入院後、当院の通所リハビリを継続している人です。

突然起こった骨折

入院前は調理場などでの仕事を80歳代までしていました。骨折するまでは、仕事をすることやお孫さんのお守りが運動になっていたようです。

アクティブに生活していましたが、スーパーに自転車で買い物に行った際にバランスを崩し転倒して骨折してしまいました。骨折後は急性期病院で手術をし、リハビリ目的で当院の回復期病院に入院しました。

入院生活と運動

入院中はさまざまな不安もあったようですが、リハビリを継続することで次第に身体が良くなっていくことを感じていました。そして、担当した理学療法士、作業療法士が資料を通じて、さまざまな運動を分かりやすく、熱心に教えたことがとても良かったようです。自身では個別リハビリの時間以外も教わった運動を自主的に継続していました。その成果もあり、退院時は独歩で移動できるまで回復し、退院しました。

退院後の生活と運動

退院後は家事だけでなく、カートを押して家族と一緒に買い物にも行っています。日常生活でもテレビを見ながら、入院中に教えてもらった運動をしています。疲れたときはベッドに横になりますが、横になっても運動をします。

つらい運動でも継続することで身体が運動に慣れ、逆に楽になるそうです。

現在、患者は当院の通所リハビリを継続しています。自身で段差昇降やマシントレーニングなどを積極的に行い、周囲の人ともコミュニケーションを取りながら楽しく運動を続けています。

骨折と運動の経験

この患者は、入院前は「運動をする」ということをあまり意識していなかったそうです。退院後は「コツコツと運動を続ける」ことで身体が良くなっていることを自覚していきます。骨折後の痛みはありますが、運動を取り入れた生活を続ける中で、それが徐々に軽減しているようで、「運動を継続してきて良かった」と感じてくれています。

運動してきて良かったことは近所の人にも伝えながら、励まし合って続けているとのことです。そして「今できることをもっと探していきたい」と、思考はとてもアクティブです。

運動をすることで身体が良くなるだけでなく、気持ちもアクティブになることを教えてくれた患者でした。改めて継続して運動していくことの大事さを感じました。

「運動をできるようにする」だけではなく、「運動を続けたい」と思ってもらえるようにすることが、私たちスタッフの大切な仕事なのだと感じさせてくれた患者さんを紹介しました。

このように運動を継続してアクティブな思考を持ってくれる人が増えるのはありがたいことですね。

稲川利光　令和健康科学大学リハビリテーション学部長。カマチグループ関東本部リハビリテーション統括本部長。